



## 梶 原 重 道

観無量壽經を読んでまず感じることは、何といつても王舎城の悲劇であり、そのヒーロー阿闍世太子の暴逆な劇的展開である。

提婆の悪逆な野心に乗ぜられた阿闍世と、阿闍世が犯した両親への罪業を軸として叙述せられているこの經典は、まさに人間性のドラマティックな一大文学である。

その巨大な構想を通じ、悲しい人間性の心の葛藤の詳述により、弥陀の本願、仏の慈悲への誘導の巧法に心を打たれないものはいないであろう。

そこにはこの王舎城の悲劇を通じて、親と子の葛藤、それは権力と利害を根底として見失った人倫の荒廃があり、その中で夫と妻との愛情の発露が、いたましいまでに大きく浮彫りにされている。

しかもその情愛を感受することなく、第二の殺害をさえ意図しようとした人間なるものの嫌悪を、如実に描写している。

月光と耆婆の諫言は、ついに阿闍世を殺母罪から救い、韋提希の深宮幽閉となった。この間の經典の所説を通じて、女性の愛欲と苦悩の代弁としてうけとれないであろうか。

人間性能の弱点に喘ぎ、人間自体の苦悩に立脚した、救済への活路は、詳説されている十六観法であろう。

その一一の観法において、自ら浄心への開道があり、仏心の大慈悲にいだかれる宗教的開顯が、願生につながる。

人間救済への白道であることを知るのである。

韋提希の懊悩と苦悶の解決は、仏陀教示の求道の他にはなかった。人間苦の辺歴をこの夫人の心中にみる事ができる。しかもその原因のすべてはわが子提婆にあることの因果に、あきらめきれぬ悲しみと、ぬぐえきれぬ苦悩があった。

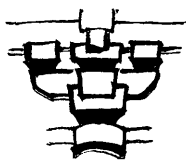
宗教的めざめによる極悪深重の凡夫観と、底下劣機の人間性への自覚なくして、この經典を読む意義はない。知機という浄土教的人間探究の原点を、あますところなく、父と子、母と子のつながりにその拠点を置いた本經の描写は、未来永劫にわたって、人類のつづくかぎりその真価が永遠にとわれるにちがいない。

普迎してこのことは、畢竟人間がもつ人間性の悲しい心の葛藤への洞察と、その自覚の典範である。時代の変遷と、人間進化の如何にかかわることなく、永遠の宿命としての人間精神の葛藤である。同時に人間それ自体如何ともないしえない凡愚なるものの証左でもある。

目を転じて、科学万能と経済的裏付けによる物質偏重の現代社会及び現代人の挙動は、同時に王舎城内における悲劇と何の異りがあるであろうか。

みよ、親子の荒廃、崩壊した父子関係の実態を想うがよい。

父の座を奪い、その権力を放棄せしめた現代家庭の崩



## 令心眼見を想う

壊にしても、母性喪失と離婚多発による不安家庭の続出現状を回顧し、王舎城悲劇の再現を痛感するのである。

感ずることは、人間性への洞察であり、人間探究の深度における人間なるものへの確認である。謂わば人間が人間として背負っている宿命的悲劇が、この王舎城を舞台として演ぜられたに他ならない。

一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。

二には三帰を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。

三には菩提心を發し、因果を深信し、大乘を誦誦し、行者を勧進す。

この三福九品の善法も、人間の悲境に喘ぐものにとつては、弥陀の願力と慈悲心にすぎるほかにはない。

汝好く是の語を持て、是の語を持てとは、即ち是れ無量壽仏の名を持てとなり。

ここにいたって、人間なるものの帰趨すべき、經典としての基調とその真価を感得するにちがいない。

ふたたび身を現代の社会におき、心を現代の変革と激動にうつすとき、韋提希の人間喪失と孤独感に孤立する自己を発見するのではあるまいか。

物質と欲望にあけくれねばをれない現代人と、それらの環境にあつて、その汚染を排除し、深心への方向に移向するためには、但當憶想令心眼見の他にはない。

知恵第一と折紙をつけられた宗祖法然上人でありなが

ら、何が故に十惡五逆の法然房を見究めたのであろうか。人間なるものへの極重惡人の機を洞察し、その如何ともなし得ない性能への深い正見が、弥陀の本願念仏を撰択し、その限らない慈悲心にいだかれるところに宗教的救済と、光明攝取の境を発見したのである。

情報過剰とその管理下に、人間が人間でなくなり、連帶性を失い、不在と、喪失と、疎外の中にあつて、いたづらに繁榮がもたらせた貧困のもとに、ゆたかな物質の洪水によって孤立化した人間の悲劇は、但に憶想して心眼をして見せしむることの他には、現代の人間をとり戻す方途はあるまい。

八万四千の光明に包まれていながら、しかし現代人はその一一の光明すら感受することができないのである。過剰にして豊饒な物質文明の生活に圍繞せられながら、使い棄てではできても、そのものの「を」をあらしめた因縁と条件への恩恵は寸毫も感ぜられなくなつたからである。経済による日本の世紀をつくりあげながら、どうして零落の途を辿らねばならなかつたのであろうか。

文化と福祉による生活水準を高めながら、どうして貧困に喘がねばならなくなつたのであろうか。圍繞せられている八万四千の相の中で、現代こそ一一の相にめざめるべきではないか。

心眼をして見ることを要に感じる。

(昭6年卒 浄土宗開宗八百年事務局長)